

秋田雨雀(あきた・うじゃく)☆常設展示作家

1、秋田雨雀の生涯

<生涯1 幼・少年時代> 0歳～18歳 1883～1901

父玄庵は失明の産科医で心眼と号して俳句をよくした。母まつは働き者だったが霊媒的素質があり感情面の強い女性だった。

小学校の同級生に、後の口語歌人鳴海要吉と小野川懋がいた。3人は家も近かったのも神明宮や黒石公園、浅瀬石川べりによく遊んだがその交流の中から文学的素養が芽生えた。

1897(明治 30)年青森県第一尋常中学校(後の弘前中学校)に入学。小柄でひ弱な肉体と、田舎ことばへの強い劣等意識を持つ雨雀は向学心に燃えていた。しかし、当時の大多数の教師は授業に不熱心で、幻滅を感じた。

1902(明治 35)年同校を卒業した雨雀は、医者にと願う父に背き、体格検査で不合格になったのを幸いに、東京専門学校(のち早稲田大学)英文科に進学。

<生涯2 戯曲家雨雀の誕生> 19歳～30歳 1902～1913

上京した翌年、幸徳秋水ら社会主義者の演説に啓発され、国家や平等などについて真剣に考えるようになっていく。大学在学中に自費出版した新体詩集『黎明』の中に「剣」「戦の後」の2編の反戦詩と思われる詩が含まれているのも、その影響かと思われる。

大学卒業後、小説「同性の恋」で世に出たが、戦争未亡人と結婚していたので生活は厳しかった。島崎藤村の紹介で雑誌「新思潮」の編集に関係し、イプセン会の記事を担当する。

やがて小山内薫の勧めもあり、新しい方法を求めて戯曲の創作を始める。

1911(明治 44)年、戯曲と小説集『幻影と夜曲』を出版し、1913年の芸術座創立にも参画して演劇人への道を歩んでいった。

<生涯3 凝視から戦闘へ> 31歳～44歳 1914～1927

1914(大正3)年芸術座を脱退、沢田正二郎らと美術劇場を組織し、北海道巡業をしたが興行は大失敗。その経済的重圧に加えて父が墮胎罪で有罪、次女が病没するなど耐え難いほどの苦難が次々と降りかかる。

これらの苦難を克服し、自信ある戯曲や、「永遠の子供」のために優れた童話を書き、エスペラントを学び、講演で人々に感動を与え得たのは、盲目の詩人エロシェンコとの出会いで人生を見直すようになったからである。現実を凝視し、内的に強く戦うようになり、戦争や暴力に対する抵抗意識を主題にした作品も多くなっていく。現実と対峙しながら宗教や哲学に救いを求め、更にそれを乗り越えるために人道主義と社会主義に傾斜していく。

＜生涯4 苦悩の時代＞ 44歳～62歳 1927～1945

1927(昭和2)年、演劇研究のためロシアへ渡り、ソヴィエト革命10周年記念式典に小山内薫と国賓待遇で出席し、1年後に帰国をする。以後は全く演劇の筆を断ち、童話も殆ど書かなかった。そして演説中止の弾圧の中を各地への講演旅行を続けた。

やがて、妻の病気や長女千代とその夫尾崎義一(上田進)の間の孫静江の養育のために耐え難いほどの家事に追われ、苦悩の中を1940(昭和15)年に「演劇の創造方法の問題」の名目で検挙される。翌年4月妻きぬ他界。

童話集『太陽と花園』は発禁となり、戯曲「埋もれた春」は警視庁から上演禁止となるなどの、筆舌につくせぬ逆境におかれる。

1944(昭和19)年、孫静江をつれて郷里黒石に疎開する。

＜生涯5 「永遠の子供」雨雀＞ 62歳～79歳 1945～1962

40年間住みなれた雑司ヶ谷を去り故郷に帰った雨雀は、新城の「黎明草舎」に居を移す。そして、嬉々として政治演説や文学講話などに出かけ、多くの人々に深い感動を与えた。

1947(昭和22)年参議院地方区立候補、惨敗。その年歌人石沢たき子と結婚。胸部疾患再発徴候の中を、講演と福祉向上のための視察や労働争議のために、連日走りまわった。

翌48年上京し舞台芸術学院学長に、50年に日本児童文学者協会会長となる。

1959年10月、孫静江が十和田町にて命を断つ。最愛で、唯一の肉親を失ったが悲しみを克服し、「不死鳥」の運動を展開した。

1962(昭和 37)年5月 12 日、常に大衆や若い人々の幸福を願って行動した「永遠の子供」雨雀は、79 年のその生涯を閉じた。

2、秋田雨雀の代表作

○戯曲「埋れた春」

戯曲、2幕。1912(明治 45)年に雑誌「早稲田文学」に発表され、大正3年4月に有楽座で初演。以後度々上演されたが、昭和 17 年には「東宝新劇研究会」公演予定を警視庁から訂正を求められ、上演禁止となった。

春も浅い東北地方の小さな封建的な町。隣同士でありながら、おとなたちは醜い争いをつづけている。その中で 14 才の少年藤之助ときみ子はお互いに好意を抱いていた。2人は、おとなたちが不用意に用いる言葉できずつき、不用意な言葉に好奇心を抱いて蔵の中に入っていく。不案内な藤之助は「にがり壺」の中に落ちこむ。

極めて郷土色にあふれ、詩情が豊かで清潔な雰囲気のためよい作品である。また、藤之助ときみ子の会話も澄んで美しいものがある。

「二足の下駄が夕日に照らされているが、誰も来ない」で、「極めて静かに幕」を引くという結びは、人間社会の不注意と醜さを象徴しているように思われる。

○戯曲「国境の夜」

戯曲、4幕。1920(大正9)年に雑誌「新小説」に発表され、大正 10 年に有楽座で初演。以後度々上演される。

「わが国先住民の性格と分裂を起こしているブルジョアの生活を対称して示そう」と意図した作品だと作者は述懐しているが、人間生活と心理に対する真剣な批判が読みとられる作品である。

北海道十勝平原の開墾者大野三四郎は、若い頃から他人に恩を売らない代わりに他人の世話にもならぬという哲学を持って成功し、財産を築いた男である。

ある猛吹雪の夜、一夜の宿を乞う親子の旅人に戸を開けてやろうとする妻や娘の願いも聞かず、自分のエゴイズムを押し通したために3人の旅人を死に追いやる。その夜、娘には非人間性を批判され、覆面者(主人の影)には子供らを殺すよ

うに威嚇されて悪夢からさめる。他人は殺せても自分の娘は殺せない自分に気づき、翌朝訪れたアイヌの老人を抱き、本当の自分をとりもどす。

○戯曲「骸骨の舞跳」

戯曲、1幕。1924(大正13)年4月、雑誌「演劇新潮」に発表。この作品を掲載したために「演劇新潮」は風俗壊乱のかどによって発売禁止となる。

作品の背景には関東大震災後におこった社会的脅威や闘う人々を殺害した政治的反動の、狂乱じみた社会がある。戒厳令と治安勅命を楯に、朝鮮人が暴動をおこして攻めてくるというデマに踊らされて、多くの朝鮮人を殺害していった。「骸骨の舞跳」は、これら一連の事件に抗議し、「国民思想を裸にする」意図で書かれた。

朝鮮人摘発のための自警団員には甲冑、陣羽織、軍服などを着せ、空虚な「国民思想」やかびの生えた道徳と英雄主義、民族主義の仮面をはぎとって、生命のない操り人形、醜い骸骨をおどらせ、罪なくして死んでいった人々の幸福のために神秘による再生を祈るのである。

戦争や暴力への抵抗意識を主題にした、表現主義風の作品で、社会批判者雨雀の面目躍如たるものがある。

○童話集『一郎とにぎりめし』

雨雀は娘の「自由教育」の一環として大正8年から童話を書き、5冊の童話集を世に出した。『一郎とにぎりめし』は最後のもの。「太陽と花園」など他に収録された作品に戦後のものを加えて18編を収めているが、雨雀の人生観が出ている好編ぞろいである。

「太陽と花園」は他人の言に左右される菊作りの話で、大正期の自主性を失ったインテリを風刺した。「白鳥の国」は、片目の親鳥が両目で生まれた子をかたわだと思って目をつぶす話。日本の若い世代が政府のために迫害されることへの抗議である。「旅人とちょうちん」は津軽と南部の愚かな争いとおとなのエゴイズムを主題に、光は自分だけを照らすためのものではないという雨雀の人生観が出ている。「先生のお墓」は封建的な田舎町の一青年教師の薄幸な生涯を描いているが、雨雀の世界観が出た佳作である。「犬と手ぶくろ」は作者と思われるおじいさんと犬のほほえましい交流を描き、奥行きのある作品。

3、秋田雨雀のキーワード

<キーワード1 永遠の子供>

「永遠の子供」という表現は、雑誌「胎盤」(大正9年・黒石)の中で雨雀が初めて用いたことばである。雨雀は「何処までも発達して行こうとする性質」を持ち「自由でありたいという欲望」と「美しいものを愛する感性」そして「正義を愛する心」だと述べている。これらは、単に子供のためのものにかぎらず、雨雀の考える理想の人間像でもあろう。そして、その「永遠の子供」のために雨雀は童話を書きつづけたのである。

人類はいまだ理想の状態に達していないために、現代はそれに向かう過程であり、雨雀のいう「永遠の子供」とは人類の未発達の状態をも意味しているようだ。だから童話は子供のためにだけ書かれるものではなく、おとなの反省を促す目的を持って書くものだということでもあろう。発達を願い、自由を欲し、美と正義を愛する心が「永遠の子供」であるならば、雨雀自身が終生それを持ちつづけた人でもあった。

<キーワード2 自由教育>

雨雀は娘千代に対して大正9年から同15年まで「自由教育」を行った。国家主義的色彩が強く、封建的な倫理観を基礎におく道徳を重視した、その当時の軍国主義的学校教育を拒否したのである。

雨雀は、おとなの作った道徳や善悪の基準を児童に強制することは児童にとって不合理であるうえ、人類の未来にとっても大きな損失になると考えていた。そして、児童の生まれついて持っている伸びようとする性質を自由に発達させなければならないという。しかし、その場合に単なる童心の讚美に終わったのではなく、独自の具体的教育観を持っていた。生物学的教育を土台に、世界共通語エスペラントを通じて世界主義的な考えを子供らに教えるのである。それに加えて児童文学や演劇、音楽によって情操教育をほどこそうとした。世界的視野から物をながめ、世界観を育てるための教育を「自由教育」といっているようである。

<キーワード3 不死鳥運動>

「不死鳥」とはフェニックスの訳語である。エジプト神話に出る霊鳥で、焼け死んでも再び若い姿で生き返るということから、転じて不滅の価値や精神をさす。

1959(昭和 34)年 10 月、たった1人の肉親で最愛の孫静江が秋田県十和田町で若い命を断つ。常に「頼みにするのは若い者たち」といい、世界的視野にたつ青少年の育成に精力的に走りまわってきた雨雀の悲しみと、孫の悩みに気づかない自分に対する怒りは筆舌につくせぬものがあった。その後、雨雀は孫の永遠行の原因を追求し、そこに「現今社会のモダニズムの影響」を突きとめ、断固闘おうと決意する。

不死鳥の歌こそひびけ、とこしえに 雨雀

翌 1960 年4月、「不死鳥の会」準備会が作られ、不死鳥運動は歩みはじめる。

「生活の愛情・創造の尊厳・相談や協力や前進」の3項目を前面に押し立て、若い生命を守るために心の底から訴える運動はおしすすめられた。

4、秋田雨雀のゆかりの場所

①上京後、雨雀が 40 年間居住した

雑司ヶ谷(東京都豊島区雑司ヶ谷)

明治 38 年から昭和 19 年、故郷の黒石に疎開するまでの 40 年間に暮らした土地である。鬼子母神の森のかけになっいて、路の奥の古い二階家だったというが、午後からは若い文化人を中心に訪問客が絶えなかったようだ。雑司ヶ谷墓地を中心に、付近には文人墨客の墓が多く、雨雀は日課のように、しかも好んで散歩したという。

②幼い頃によく遊んだところ

神明宮と御幸公園(黒石市)

雨雀の生家から南方に神明宮、西方に御幸公園が、ともに徒歩で5分足らずのところにある。雨雀が同級生の鳴海要吉や小野川懋らと俳句や短歌づくりをして遊んだところでもある。雨雀や口語歌人鳴海要吉を育んだところ。

御幸公園(現黒石公園)には雨雀と要吉の歌碑が、神明宮には2人の短歌を並べて刻んだ歌碑がある。

③雨雀が地方文人と交わったところ

板留温泉(黒石市)

古くからの温泉地で、雨雀は少年の頃からよく出かけた。ここに本県新派和歌草創時からの歌人丹羽洋岳の客舎があり、雨雀はそこに逗留した。特に大正6年以降は毎年のように夏に訪れ、地方の文学青年らと会談、影響を与えた。

板留温泉から徒歩40分程度のところに黒森山浄仙寺があり、雨雀の歌碑には分骨が納められている。

④秋田家の菩提寺

法眼寺(ほうげんじ)(黒石市)

黒石市大字山形町にある秋田家の菩提寺。黄檗宗の寺院で、江戸時代から当地方の俳諧などが行なわれた場所でもある。

雨雀は、昭和37年5月12日に亡くなり、6月末に東京都豊島区西巢鴨の法福寺に埋骨されたが、それに先だち同月10日に当秋田家墓地と浄仙寺の歌碑に分骨埋葬される。当寺には父玄庵と雨雀の句碑が建立されている。

5、秋田雨雀の関連人物

☆秋田玄庵(げんあん)・まつ:父と母

父玄庵は失明の産科医で、どんな難産でも上手に取りあげるといわれる名医であった。体つきは骨太で、がっしりしていたが、温和で冷静、思いやりのある人であった。仲間と「時雨講」という句座を開き、俳句を作っている。雨雀はこの父に文字を教わり、俳句の代書をしながら漢字を習得し、人間の生き方を無意識のうちに教わっていたようだ。

母のまつは大きな商家の娘として生まれたが、感情的な面と霊媒的予言的な一面を持った働き者で、雨雀や義理の息子永三にもやさしい人であった。

雨雀は、自伝類にもこの父母の性格を受け継いだと述べているが、童話劇「吹雪の夜」他の作品の中でも父母をおもわせる描写がある。

☆鳴海要吉(なるみ・ようきち):幼なじみ

要吉と雨雀は黒石尋常小学校から高等小学校1年までの同級生であった。同級ということと、家が4軒隣りで近いということもあって非常に仲の良い友人であった。

要吉の父は子供の教育には自由で、三兄の要助などは中央の雑誌や単行本を読んでいた。要吉はその雑誌にふれて文学に目覚めた早熟な少年として育った。この要吉と雨雀と同級の小野川懋は、近くの神明宮や御幸公園、浅瀬石川辺で俳句や短歌を作って遊んだ。また、雨雀は要吉を通して雑誌や本を借りており、雨雀に大きな影響を与えた人物といえる。

明治37年、青森駅に島崎藤村を迎えたり、詩集『黎明』を藤村に送るなど要吉とのつながりから藤村との関係も生まれていった。

☆エロシェンコ:友人

小ロシアのクールクスに生まれた盲目の青年である。詩人だが、また熱心なエスペ란ティスト(国際共通語を普及した人)でもある。

東京の盲学校でマッサージの勉強をするために来日していたが、大正4年の春に鬼子母神の森を散策中、雨雀が声をかけたことを契機に、2人は親友となっていく。エロシェンコは雨雀を通じて、それまでの限られた交友から、文学者や社会主義者たちとの広い関係が出来た。しかしそれ以上に影響を受けたのは雨雀であった。災厄がつづき、人生に絶望し、厭世的になっていた雨雀は、盲人でありながらもエスぺラント運動のために熱心に働く彼の生きる姿から、人生に希望を持ち、強く生きる姿勢を学んでいった。

☆島村抱月(しまむら・ほうげつ):文学の師

ヨーロッパ帰りの若い講師島村抱月の講義は雨雀の胸を打つ。大学卒業後も指導を受けた雨雀の小説「同性の恋」が師抱月の目に止まり処女作として世に出る。また、「新思潮」編集手伝いをしたが、同誌廃刊とともに生活の手立てを失った雨雀は抱月の好意で『文芸百科辞典』編集員となるなど恩誼を受ける。

その後、師抱月は松井須磨子との恋に陥り大正2年にはその恩師坪内逍遙に背き、妻子や大学の教壇を捨てて劇団「芸術座」を創立する。抱月の前途に見切りをつけた多くの門下生は離れていったが、雨雀は幹事として参加をし、予想され

た苦しい生活を強いられる。恩誼を大切にする雨雀の性格と、抱月の人間的魅力がその底にひそんでいるともいえよう。

6、秋田雨雀の資料紹介

○君は西われは東の子なれどもおなじ広野におなじ日を見む
書画(色紙)

「君は西われは東の子なれどもおなじ広野におなじ日を見む」の短歌には「モスクワにて」の詞書がある。昭和2年9月30日ソ連革命十周年記念祭に招かれて、同郷の鳴海完造と東京を出発。翌年5月18日、八ヶ月目で東京駅に着いた。

○モスクワの秋
書画(短冊)

295 mm × 215 mm

「モスクワの秋」の詞書に「極光を見よ窓を開けよモスクワの秋」の句。ソ連革命十周年記念祭に招かれた折りの作。

○「十月の錯覚」
原稿

1925(大正14)年

210mm × 185mm(×29枚)

「早稲田文学」(238号・大正14年11月)に発表されたものの原稿である。「秋田雨雀日記」には、大正14年10月15日に戯曲「十月の錯覚」を脱稿したと見える。

○「島村先生美の学問」
著作資料(ノート)

1906(明治39)年

213mm × 170mm(96ページ)

早稲田大学に在学中に受講した島村抱月の美学のノートである。美学諸論(1)美学の参考書(2)美学の定義等の構成となっている。「島村抱月の美学の講義は柔軟性があり、新鮮味があって一番多くの聴講生があった。」(『五十年生活年譜』)

○「大正4年日記」

著作資料(日記)

1915(大正4)年

295 mm × 215 mm

雨雀は大正4年2月1日から日記をつけはじめ、以後約半世紀にわたって日記を書き継いだ。昭和37年1月21日で終わった日記47冊は現在日本近代文学館に保管されている。文学関係は勿論、社会運動等の貴重な資料として評価は高い。

7、秋田雨雀年譜

1883(明治16)年…1月30日、盲目の産科医秋田玄庵の長男として南郡黒石町に生まれる。本名徳三。

1887(明治20)年…黒石尋常小学校入学。同級に後の口語歌人鳴海要吉がいて文学上の影響を受ける。

1902(明治35)年…青森県立第一中学校卒業。東京専門学校(同年9月早稲田大学と改称)英文科入学。

1903(明治36)年…10月、堺枯川や幸徳秋水ら社会主義者の演説を聴き影響を受ける。

1904(明治37)年…6月、新体詩集『黎明』を自費出版。
7月、青森で要吉とともに島崎藤村に会う。

1906(明治39)年…箭田きぬと結婚。

1907(明治40)年…早稲田大学卒業。

6月、処女作「同性の恋」を「早稲田文学」に発表。文学生活に入る。9月、藤村の世話で雑誌「新思潮」編集の手助け

をし、イプセン会の書記を務める。

1908(明治 41)年…この年に長女千代生まれる。

1909(明治 42)年…自由劇場の会員となる。戯曲創作をはじめる。

1911(明治 44)年…戯曲「第一の暁」自由劇場が有楽座で上演する。

戯曲・小説集『幻影と夜曲』出版。

10月次女あや子誕生。

1913(大正 2)年…戯曲集『埋れた春』出版。

7月、島村抱月「芸術座」創立、幹事となる。

1914(大正 3)年…「芸術座」を脱退、沢田正二郎らと「美術劇場」を組織する。

1915(大正 4)年…盲目の詩人ワシリイ・エロシェンコに会い、エスペラントを勉強し始める。

1917(大正 6)年…8月帰郷。以後、毎年この時期に帰郷、講演や座談会、研究会で地方文化向上に貢献する。

1918(大正 7)年…戯曲集『三つの魂』出版。島村抱月永眠。

1919(大正 8)年…娘千代の情操教育のため児童文学の創作をする。

1920(大正 9)年…戯曲集『仏陀と幼児の死』出版。

1921(大正 10)年…戯曲集『国境の夜』童話集『太陽と花園』出版。日本社会主義同盟に加入。7月父玄庵永眠。

1923(大正 12)年…佐々木孝丸らと「先駆座」(土蔵劇場)創立。

1925(大正 14)年…戯曲集『骸骨の舞跳』出版。

1927(昭和 2)年…芥川龍之介、片岡鉄兵と青森、秋田他文学講演。以後昭和5年まで講演旅行多し。9月、ソ連革命 10 周年記念祭に招かれ訪ソ。

1928(昭和 3)年…国際文化研究所を創立、所長となる。

1932(昭和 7)年…長女千代、尾崎義一(上田進)と結婚。

1935(昭和 10)年…千代、長女静江を出産。

1937(昭和 12)年…4月、千代は 30 才の短い生涯を閉じる。

1940(昭和 15)年…新協劇団、新築地劇団の総検挙に伴い、重病の妻を残して目白署に検挙される。

1941(昭和 16)年…4月、妻きぬ永眠。

童話集『太陽と花園』出版、発売禁止となる。

1942(昭和 17)年…戯曲「埋れた春」上演禁止となる。

1944(昭和 19)年…4月、孫静江を伴って故郷黒石に疎開。

1946(昭和 21)年…青森県労働委員長となる。翌年参議院地方区立候補、落選。この年石沢たきと結婚。

1948(昭和 23)年…5月上京、舞台芸術院創立、学長となる。

1949(昭和 24)年…日本共産党入党。翌年日本児童文学者協会会長となる。

1952(昭和 27)年…童話集『一郎とにぎりめし』出版。

1953(昭和 28)年…3月妻たき逝去。9月、『雨雀自伝』出版。

1959(昭和 34)年…10月、最愛で唯一の肉親、孫静江永眠す。

1960(昭和 35)年…1月1日、黒石市名誉市民となる。

1962(昭和 37)年…2月盛いくと結婚。

5月12日、病状悪化し永眠す。法名「芸峻院雨雀徳声居士」